「男の貞操論」はなぜ消えたのか

小谷野　敦

一

赤川学は、かつて妻の貞操は厳しく求められたが夫の貞操は求められないダブル・スタンダードが存在していたという通説に対し、一九二〇～三〇年代の文献調査の結果、当時、少なくとも知識人のあいだでは、男も妻に対する貞操を守るべきだ、という考え方が一般的であったとして訂正を試みた[1]。ただ、やはりこれが、一時的な、かつ特定の階層の、活字媒体を通しての表現に過ぎず、実態はやはりダブル・スタンダードだっただろう、かつ、人妻の貞操だけが問題にされる姦通罪が当時は存在していた、といった反駁を加えることは可能だ。

しかし、それはさておいても、ここに一つの疑問がある。それでは、少なくとも知識階級における建前としての男の貞操論自体が、その後消えてしまったのはなぜなのか、そしてそれはどのように消えたのか、という点である。もっとも、赤川としては、その後の、現代に至る性に関する言説の調査によって自ずと答えは出ていると考えているのかもしれない。太平洋戦争後、昭和三十年の「太陽族」の出現から、次第に「性の解放」が進み、処女を守るべきかとか純潔とか貞操とか、そうしたことがらが問題にされること自体が次第になくなってゆくからである。

そのことと関連して、赤川の労作を通読して、特に最後のほう、つまり昭和期の性に関する言説の変遷を辿った部分に至り、いやでも気づかざるをえないことがあった。それは、明治・大正期の性に関する言説が、オナニーと買春とどちらがいいか、性欲は抑えられるものかどうか、といった問題を扱って、極めて真面目な口調、言い換えれば大衆に対する知識人の啓蒙的な口調で語られているのに対して、戦後のそれは、『平凡パンチ』のような若者向け週刊誌の記

事から、作家のエッセイに至るまで、かなり露悪的な、冗談半分の「悪徳の勧め」めいた口調に変化しているということである。

もちろんこのような言説の質の変化は、性に関する言説だけに現れる現象ではない。「知識人／大衆」の区分が崩れ、前者が後者を啓蒙するというスタンス自体が戦後受け入れられなくなったことによって、活字表現による言説の質自体が大きな変化をこうむったのである。そして、吉行淳之介、野坂昭如のような「不良性」を売り物にする作家たちが、かつては岩野泡鳴、太宰治、檀一雄のようなデカダン作家が、自嘲を込めつつ語ったような、文士の特権としての無頼生活を、一般の読者、なかんずく男子学生に勧めるというスタイルが一時的に隆盛を見たのである。

赤川は、明治期以後の性に関する言説を網羅する形で歴史社会学的調査を行っているが、そのリストから、文藝作品はもちろん、作家の言説もほとんど抜け落ちている。これは方法論上の問題であって決して手落ちではないのだが、先に述べた「真面目な言説」と、「露悪的な言説」言い換えれば、男性ホモソーシャル世界の本音を率直に語る言説とのあいだには、「文学言語」の果たす言説空間における役割がある程度関わっているのではないかと思われる。そこで本稿では、文学言語、あるいは作家の言説を中心にして、「男の貞操論」のようなものが消滅してゆく過程を辿ってみたい。

二

明治二十三年一月、森林太郎が、処女小説『舞姫』を、『国民之友』付録として発表すると、明治女学校校長、『女学雑誌』編集人の巌本善治は、激怒し、『女学雑誌』同月の号で「撫象子」の署名でこう書いた。

森林太郎氏の「舞姫」に対しては、吾れ一読の後ち躍り立つ迄に憤ふり、亦嘔吐するほどに胸わろくなれり、嗚呼此れ大学才子留学の末路か、彼能く書を読めり、彼よく文を草せり、彼よく新聞紙に報道を為せり、而して彼は正礼を履まず一舞姫に私通し、不正の児を挙させてクロステル街隠四階の黒室裏に恋々踟躕し、一と度び伯に招かるれば犬の如く仕へ、再び招れて軽答鬼となりて東に帰らんとす、其意志の弱きと女俳優よりも弱く其操なきは商人よりも甚はだし、斬て彼は数年の親しみを断ち、但し正義の為めに断つに非ず黄金虚栄の為めに断ち、彼の憫れむべき佳人を狂ならしめて意気地なくも帰国の船に上り、船中又た〳〵思ひ出してくよ〳〵と歎き其次第を筆記したりと（後略）[2]。

『舞姫』は、石橋忍月その他の批評家からやはり非難を受け、森が変名で答えることによっていわゆる「舞姫論争」に展開した[3]が、

巌本の文章は比較的紹介されることが少ないし、鴎外も巌本には答えていない。鴎外と巌本のあいだでは、それ以前に「文学と自然」論争が起こっているのみだ。

巌本善治は、はじめ農学を学んだが、中村正直の影響下に婦人解放論に目覚め、木村熊二、鐙子夫妻に導かれて受洗し、『女学雑誌』の発刊に加わり、木村夫妻、植村正久らとともに明治女学校開校の発起人となった。ほどなく『女学雑誌』が『女学新誌』に取って代わり、初代編集人の近藤賢三が退くと二代目編集長になり、木村鐙子の死によって熊二が隠棲すると、明治女学校の校長になり、学校と雑誌の両方の指導者となった。私生活では、英文学者の若松賤子を妻とした。当時の多くのキリスト教系の知識人がそうだったように、巌本は一夫多妻を容認する前近代日本の風習に抵抗し、廃娼運動を展開し、女子教育の進展を図った。明治七年に『明六雑誌』誌上に「妻妾論」を発表して一夫一婦制を唱えた森有礼とともに、巌本は初期「男子貞操論」の両輪だったと言えるだろう。

簡単に確認しておけば、当時の日本のキリスト教系知識人が、公娼制度は未開野蛮の日本の風習で、西洋にはない、と考えたのが事実誤認であることは今日確認されている。[4] しかしながら西洋でも女性解放運動系、およびキリスト教系の廃娼運動が展開されており、巌本も日本基督教婦人矯風会の設立に加わった。もっとも廃娼運動に関しては、現在ではもっぱら底辺女性の救済というフェミニズム的な側面が、中産階級的性道徳に呑み込まれてしまったという評価がフェミニズム側からなされている。しかし、「男の貞操論」はあまり論じられたことがない。

さて、話を戻すが、徳川期の文藝ないし言説には、十七世紀の遊女評判記[5]や色道論、浮世草子から、十八世紀の洒落本、十九世紀の人情本に至るまで、売買春や一夫多妻制を容認するものが数多かった。近代に入ってからは、少なくとも初期の段階ではプロテスタント系キリスト教の影響下にこうした風潮に異議が申し立てられたのだが、赤川がオナニー有害論について推論するように、前の時代に全く存在しなかった思考法が突然浸透するとは考えにくく、家風によってさまざまではあっても、登楼を良しとしない気風は、武家、および上層町人の間にある程度あったはずであり、洒落本や人情本、さらに浮世絵や春画、春本の作者は、戯作者として卑しめられる存在であった。例外的に、操正しい人物を描いた曲亭馬琴の読本があったくらいである。[6]

だからこそ明治十八年、坪内逍遥は、『小説神髄』を著して、小説、すなわち虚構散文が、西洋では立派な藝術（当時の言葉で「美術」）であると宣言しなければならなかったのである。そして巌本もまた、文藝による女子の情操教育を図り、妻の賤子を始めとして、田辺花圃、中島湘煙（岸田俊子）、清水紫琴などの女性作家に活躍の場を与えた。だが当然ながら、巌本の考える「文学」は、ヴィクトリア朝

的、キリスト教的な道徳に叶うものでなければならず、その代表作として、賤子の訳したバーネットの『小公子』がある。いっぽう逍遥は、巌本よりも文学へのコミットメントが深かった分だけ、ややこしい事態に直面しなければならなかった。つまり、一方で逍遥は、公式的な道徳どおりに振る舞う人物を主人公とする馬琴読本を「不自然」として退けながら、欲望のままに振る舞う人物を英雄視する為永派の人情本をも「猥褻」のゆえに退けなければならなかったからである。[7] 結局逍遥は、人情本風の『当世書生気質』の後で、結婚に関する処世訓風の『妹と背かゞみ』を書いたあと、ほとんど小説を書かなくなる。逍遥に比べると、「自然」を描けば自ずと「美」になるはずだと主張して森鴎外に一蹴された巌本の文学観は甘いと見えるかもしれないが、少なくとも巌本にとっては、「道義」は文学よりも重んじられるべきものだったのであり、その点でゆるぎはない。

文学言語においてたとえば不義密通が描かれていた場合、それが文学言語であるかぎりにおいて容認する、という立場を打ち出したのは徳川期の本居宣長だが、いったん文学言語における表出を容認するとそれはいつしか現実を変容させる。この問題にどこかでぶつかった巌本と逍遥は、ともに運動家、ないし教育家の位置に退くことになる。また別の理由によって二葉亭四迷が文学から退いた後、文藝の世界を支配したのは、硯友社だった。その総帥である尾崎紅葉の明治二十年代の長編小説二編、『伽羅枕』と『三人妻』を見れば事態は明らかである。前者は北村透谷が批判したとおり、西鶴の『好色一代女』を下敷きにして、ほぼ売春婦としての流転の生を送った女をヒロインとしながら、売買春に対する批判的な視点を見いだせない。後者に至っては、妻がありながら三人の女を次々に妾にしていく金持ちを主人公にした『金瓶梅』ばりの作品であり、紅葉はあたかもここで、廃娼運動や一夫一婦制の主張に真っ向から抵抗しているかのようであり、後に国木田独歩から、前期の紅葉は洋装せる元禄文学だと評されている。

オナニーがいいのか、買春のほうがいいのか、性欲は抑えられないものなのか、といった論説言語による議論は赤川の著書に詳しいので縷説しないが、文学言語の領域では、こうした問題があからさまに論じられることはあまりなかった。ただ明治三十年代には徳冨蘆花が『小説　思出の記』や『不如帰』を書いて、夫婦愛の礼賛を行った。[8] 例外的に、赤川が取り上げている文学史上の言説は、明治三十四年の高山樗牛による「美的生活を論ず」であり、樗牛は性欲の満足こそ美的生活だ、と生半可なニーチェ理解の上に喝破してみせたものだが、赤川によればここでの「性欲」は、現在の意味とは異なり、欲望一般のことであるらしい。樗牛は一時期盛んに発言したが早世し、後にその浅薄さを嘲笑されることになるが、実はその後の文学史上における「反禁欲・快楽主義」の原点をなしていると

さえ言えるのである。

文学言語の世界で「性欲」が問題系として浮上したのが明治四十年の田山花袋『蒲団』によってであることは衆目の一致するところだろう。ただしこれを「性欲」を扱った作品とするのには私は異論があるが、別に述べたので繰り返さない。[9] 妻子がありながら女弟子に執着してしまう三十代の作家を主人公とする、半ば独白体のこの作品に対して、柄谷行人は、「《蒲団》ではまったくとるにたらないことが告白されている。たぶん花袋はこんなことよりもっと懺悔に値することをやっていたはずである」と述べている。[10] おそらく「もっと懺悔に値すること」とは登楼、すなわち買春のことだろう。ただ『蒲団』より僅かに先行する短編『少女病』では、やはり少女に執着する男が、買春もしないでオナニーばかりしているからあんなことになるのだと同僚から評される場面がある。ただし『少女病』の主人公は独身であり、独身男の買春という場面は、その後も、二葉亭四迷の『平凡』、田山花袋の『田舎教師』、志賀直哉の『暗夜行路』などに、いささか哀れな、相手のないためのやむない童貞喪失の場面として描かれている。ことに志賀の場合、内村鑑三門下のキリスト者として出発しているため、性に関する苦悶は甚だしかったが、それも別に述べたので繰り返さない。

ほかにも、明治末期から大正期にかけて、森田草平と平塚明子（はるこ）（後のらいてう）の心中未遂事件とそれを森田が自ら描いた小説『媒煙』とか、実の姪との情事を赤裸々に描いた島崎藤村の『新生』や、北原白秋が有夫の女と姦通して監獄に入るとか、有島武郎がやはり有夫の新聞記者波多野秋子と軽井沢で情死するとか、文学者の性的スキャンダルが相次ぐのだが、森田には妻がありながら、もっぱら問題になったのは明子の貞操であったし、藤村や有島は妻を亡くした後の出来事で、むしろ姪との近親相姦とか有夫の女との情死とかが問題にされたのであって、妻のある男の買春や浮気自体は、ほとんどスキャンダルとしての価値は持っていなかった。あるいは近松秋江が、妻に逃げられた後の女との交情や娼婦との経緯を描いて赤木桁平（こうへい）から「遊蕩文学」呼ばわりされたが、赤木はそもそもそうした情事を文藝の題材にすること自体を批判したのであって、「男の貞操」を問題にしたわけではない。

明治四十年から凄まじい隆盛を見せた自然主義文学は、たとえばロマンティックな筋立てを持つ泉鏡花に作品発表の場を失わせ、その鏡花に心酔するデビュー前の谷崎潤一郎を絶望させるほどだったが、おおよそ二つの行き方があったと考えられる。一つは、藤村の『家』や花袋の『生』や『妻』のように、極めて平凡な、退屈な生をそのままに描写するもので、これが極限に達すると、正宗白鳥の『泥人形』のように、新妻を泥人形呼ばわりする残酷描写にまで行き着く。だが、もう一つの方向があった。それは、人間を性欲その他の欲望に突き動かされる存在として捉え、その存在様態をありのま

まに描くというやり方である。ここでは、既に明治三十年代に輸入されていたショーペンハウアーの厭世的な哲学や、ニーチェの超人主義、反キリスト教、さらにマックス・ノルダウの『退化論』に代表される西洋世紀末のデカダン主義が複雑に絡み合っている。(11)

これらの思潮をネガティヴに見るならば、人間は自己の意思による制御の不能な欲動に突き動かされる存在として捉えられるが、ポジティヴに見るならば、世間的な道徳によってその欲動を掣肘すべきではなく、飽くまで快楽を追求すべきだという思想になる。ただし後者は、ほとんど常に、あたかも性行為の後のような悲哀感に満たされている必要があったし、徳川期の戯作者のような卑下を抱えていなければならなかった。具体的に後者の方向を採ったのは、永井荷風であり、谷崎潤一郎であり、徳田秋声であり、岩野泡鳴であった（「悲哀感」は谷崎については当てはまらない）。ただし本稿の課題である「男の貞操論」に関していえば、荷風はいかに紅燈の巷を描こうとも自身は僅かな一時期を除いて独身だったし、谷崎もそういう問題系は避ける形で耽美主義に邁進した。とすると最も尖鋭だったのは岩野泡鳴である。自ら「悪魔主義」を標榜した泡鳴は、明治四十三年、妻子ある作家の田舎藝者との情事を描いた『耽溺』を発表し、続けて、妻子を捨て、妾を次々に取り替える自身の生活に取材した「泡鳴五部作」を大正九年まで書きつづけるのである。

もはやそこには近代初期の文学者たちの持っていた美と道徳の相剋とかいった問題は存在せず、ただ己れの美意識と価値観を信じ、世間体を打ち捨てた「文士」の姿があるのみだったのである。唯一泡鳴を支えた価値は、「自己に忠実」ということであった。この当時の文壇における「自己に忠実」ということへの価値付与は大きく、志賀直哉などは今日に至るまでこの点で高い尊敬を贏ち得ている。泡鳴は尊敬されていないけれども。

しかしながら、大正期までの文学作品は、「文壇」および一部文学青年の読み物でしかなかった。赤川が網羅したような通俗「性」指南書の類と同じレベルで大衆に享受されていたのは、夏目漱石の小説や、大衆作家の時代小説くらいであったろう。泡鳴、荷風、秋声、秋江などの「遊蕩小説」は、少数の読者しか持っていなかったのである。大正十二年の関東大震災の折りに憲兵大尉甘糟正彦に虐殺されるまで、アナーキストの大杉栄は、「自由恋愛」を提唱して妻のほかに二人の愛人を持ち、スキャンダルを振りまいていたが、これもアナーキストという特殊な人種の振る舞いに過ぎず、より影響力を持ったのは、大正十一年に発表された厨川白村の『近代の恋愛観』のほうだったろう。この頃析出された「純文学」という概念の下に括られる小説群は、通常人には真似のしえない生活を実践する者たちによって書かれ、少数者の間でのみ流通していたのである。

四

この趨勢に異変が起こるのは、昭和初年、改造社などが、一冊一円の「円本」と呼ばれる日本近代文学の全集を出版し始めた頃からである。吉川英治の『宮本武蔵』のような大衆小説が、性的に極めて禁欲的な主人公を据えることによって大衆の道徳意識を満足させていたのに対して、純文学の「毒」が次第に大衆化されてゆく。昭和始めの十年は、プロレタリア文学の全盛期だったので、おのずと「デカダン」文学はその影に隠れる恰好になったが、昭和十年、文藝復興の掛け声とともに、芥川賞・直木賞が創設された。そしてこの年、文壇ではそれなりの地位を占めながらも、同じ新感覚派の横光利一ほどに目立った存在ではなかった川端康成が、後に『雪国』として纏められることになる連作の第一回「夕景色の鏡」を発表するのである。まことに、『雪国』こそは、「男の貞操論」における画期的な事件ともいうべき作品であった。当時弱冠三十六歳で芥川賞の銓衡委員となった川端は、新進作家の太宰治が、共産主義運動と薬物中毒と度重なる女との心中事件でデカダンな生活を送っているのに対し、嫌悪を表明した。しかしその川端が書いている作品こそは、東京に妻がいるのであろう舞踊評論家島村が、新潟と覚しき雪国で、駒子という藝者との情交を重ねるという悖徳の小説だったのである。にも関わらず、人々はその作品を藤村の『新生』や、荷風や谷崎や秋声や泡鳴の作品ほどに悖徳的だとは思わなかったし、いつしかこの作品は昭和期の、ないし二十世紀の日本を代表する作品として国際的な知名度を得ていくことになるのである。

ごく静かに、革命は起こった。『雪国』は、遠くシナの『遊仙窟』の流れを引いているのは明らかだし、桃源郷ものでもある。主人公は「国境の長いトンネル」によって現世から遠ざけられており、本妻との葛藤は微塵も描かれることがない。まさにそれは鶴田欣也のいう「向こう側」の文学であり、ほとんど鶴田の「向こう側」の文学という着想自体が、『雪国』から生まれていることは間違いない。[12] ひとは、『雪国』を読むとき、十中八九「男の貞操」などという問題を忘れている。島村と駒子のセックス・シーンも、二人の会話だけで構成されるという巧みさ＝狡猾さである。この文学的装置によって、廃娼論とか男の貞操論とかいったこちたき話題は一挙にうっちゃりを食う。この点において、他のどの文学者よりも悪魔的なのは、川端である。

ただし、何もここで日本の大衆が川端にころりとやられてしまった訳では全然ない。日本の大衆が川端康成という名前に着目するのは、遥か後、昭和四十三年に彼がノーベル文学賞を受賞したときのことだ。それにしても、男女を問わず、「貞操」が言説の上で問題になるのは、赤川によれば、単行本では昭和十年の真田五郎『性の真

相』、雑誌では昭和十二年の『婦人公論』の「男の貞操座談会」が最後である。川端の魔術が、真っ向から「買春のどこが悪い」と開き直るよりはるかに巧みに、そういう言挙げは「野暮」だとやんわり人々を洗脳したというのは明らかに考えすぎだろう。ただ、この時期から戦争を狭んで戦後まで、あまり性に関する言説というのは現れていない。時局柄話題としても好ましくないとされたのか。

だが、文学史的には、明らかに、「男の貞操」をめぐる言説は戦後、かなり広範に行き渡ったものとして存在している。昭和二十三年の石坂洋次郎『青い山脈』である。

石坂は、昭和六十一年の死去のあと、急速に読まれなくなったが、その作品、なかんずく映画化、ドラマ化され、その主題歌が今なお人口に膾炙している『青い山脈』は、風俗史の資料として絶対に読まれなければならない。これは、田舎の女学校を舞台に、女子学生と女性教師に、学生と若い医師の四人を中心にした比較的簡潔な物語である。そこでは、女子学生が男子学生と一緒に町を歩いただけでスキャンダルになってしまう「封建的」な気風があり、彼らは協力して、仄かな恋愛感情さえ封殺しようとする田舎町と学校の雰囲気に抵抗していくが、同時に交際は清純なものでなければならない。たとえばこれを、明治三十年代の「女学生小説」である小栗風葉の『青春』や小杉天外の『魔風恋風』と読み比べてみると、私たちの遠近法の狂いに気づかざるをえない。『青春』や『魔風恋風』では、女学生はどうせ男を拵えて遊んでいるもの、という好奇の眼差しで見られており、事実前者のヒロインは恋人の子供を妊娠して堕胎するし、いずれも期待通りの色恋沙汰を演じていて、あたかも昭和五十年以降の「妊娠小説」つまり中沢けいの『海を感じる時』や柴田翔の『ノンちゃんの冒険』、あるいは大島弓子や文月今日子の「妊娠マンガ」のようなのである。このことが示しているのは、女子学生が男と一緒に町を歩いてさえスキャンダルの種になる、そういう大衆の意識が全国レベルで成立したのが、大正期から昭和の初めにかけてに過ぎない、ということである。言い方を換えれば、大衆レベルで「結婚前の純潔」が規範として成立していたのは、たかだか二十年程度のことに過ぎなかったということだ。もちろん、それは今日なお一部に残っている。

しかし、ここでの主題は、女の純潔ではなく、男の貞操だ。『青い山脈』で印象的なのは、青年医師が藝者と知り合いである、つまりそういう場所で遊んでいるのを知った女性教師が、ほぼ彼の未来の結婚相手候補として、彼を窘める場面である。つまり、清潔な男女交際に対して禁圧的な社会とはともに戦った男女が、結婚後の藝者遊びや娼婦買いについては、厳しくこれを戒める、というのがこの作品の結論なのである。そして昭和二十三年という段階では、こうした男女関係のあり方が、とりあえず理想的なものとして大衆に受け入れられていたということだ。(13)

だが、私の確認したかぎりで、「男の貞操論」は、これが下限である。なぜ、この後、「男の貞操論」は消えてしまうのか。そこで、私がかねがね引っかかっている論文がある。昭和三十三年に発表された伊藤整の「近代日本における『愛』の虚偽」である。伊藤はここで、男女のあいだの、あるいは夫婦のあいだの「愛」という概念は、キリスト教と密接に結びついており、そのような伝統のない日本にこれを移入しようとしたのが虚偽だった、と論じている。そして、こう言う。

人間の男女が自由に交際し、他者と触れることに生き甲斐を感ずるキリスト教系の思考法による交際社会のない日本では、多くの男女は「愛」のない見合結婚をしなければならず、それを彼らは不満に感じた。また恋をし合って結婚した女は、それを「愛」という言葉で錯覚するために、人間の交際は独立の男と男の間にのみあり、その席に出る女は本質上娼婦に過ぎないという日本の社会で、確実にやって来る男性の娼婦買いに直面して、「愛」という永遠なものが失われたことを、大きな絶望とともに味あわねばならない。一九五八年度から日本では娼婦は廃された。しかし、男性が仕事をし、交際しているところの場所には、実質上の娼婦である酒場の女、女給、芸者がいるのであり、彼女らは自己を男性に売ろうとしてそばに侍している。男性は極めて容易にそれらの女性とすぐ触れる社会に生きているのだ。即ち公式的には永遠の「愛」というもので女性と結婚した男性は、実質的には仕事と交際において日夜、娼婦たちの中に混って生活しているのである。

（中略）

私はこのことをもって、実質上、日本の女のあり方は江戸時代的なのだから、男性に性的放縦さをゆるせ、と言っているのではない。愛という言葉のキリスト教的な祈りと、不可能な道徳への反復的努力のないところで、愛という偽りに満ちた言葉を使うな、と言っているのである。(14)

この文章は、はじめ『思想』という学術雑誌に掲載され、昭和三十七年刊の評論集『求道者と認識者』に収められたが、一九八一年に岩波文庫に採録されたことによって、広く知られるようになった。もっとも伊藤はこれに先立つ昭和二十九年に『女性に関する十二章』というシニカルな女性論をベストセラーにしており、そこでも「愛」などということにあまり拘泥しないように、と警告している。そして恐らく前者の論文が淵源の一つとなって、日本には西欧的な愛の形而上学が存在しない、という通説が生まれ、近年の「ブルセラ論争」や「援助交際論争」でも、日本にはキリスト教的な厳格な道徳が存在しないから、女子学生に説教しても無駄だ、という文脈で用いられている。いわば「伝統不在パラダイム」とでも言おうか、そ

の発祥地は、恐らくこの伊藤論文なのである。

伊藤の論文は、学術論文というより文藝評論に近く、ところどころで形而上的な断定を行うので当否の判定が難しい。今引用した部分についてまず言えるのは、あたかも西洋人は買春をしないかのように記述しているところなどが、例の日本特殊論的な事実誤認であるということだ。いま西洋の都市を訪れると、夕方から夜にかけて多くのストリートガールが出没する。ドイツやオランダでは売春は非犯罪化されているし、この文章の後のほうで伊藤も確認するように、西洋社会でもキリスト教的な規範は解体しつつある。それにしても、まだ問題が二つほど残っている。一つは、仕事の席に酒場の女、女給、藝者が侍るという日本的慣行の問題であり、もう一つは伊藤がほとんど諦念をもってこれを容認してしまっているという点だ。伊藤は、「男性の性的放縦さを許せというのではない」と断っているが、これでは許せと言っているに等しい。というより、伊藤の物言いには、何かに深く疲れた、という様子が漂っているのである。いったい伊藤整に何が起こったのか。

言うまでもない。チャタレイ裁判である。昭和二十五年、D・H・ロレンスの『チャタレイ夫人の恋人』を翻訳出版した伊藤は、書店主とともに猥褻罪で起訴され、この文章を書く前年の昭和三十二年に有罪判決が下りている。伊藤は、疲れ切り、傷つき、日本社会の何ものかに絶望したに相違ない。英文学者福田恆存を含む多くの文学者が伊藤の弁護に立ち上がったが、英文学界の重鎮斎藤勇（たけし）は、検察側証人となった。問題となったのは、この作品が不倫を扱っていることより、単にセックス描写だった。一方で文学作品の性描写をやり玉に挙げながら、政治家や企業人が藝者を侍らせての料亭接待を行っているという日本社会の欺瞞に、伊藤は激しい怒りを覚えたに違いあるまい。この文章は、日本の男の性的放縦を認めるどころか、そういう二重基準からなる社会への愛想尽かしだったのではないか[15]。

『チャタレイ』は、戦争で負傷したため不能になった夫を持つチャタレイ夫人が、愛のない夫婦生活を嫌い、森番のメラーズと情事を持つ、という話だ。これを考えると、「貞操」ということの意味が変化しているのが分かる。たとえば昭和初年に与謝野晶子は「貞操は道徳以上に尊貴である」を書いて、一律に貞操を守ればいいというものではなく、愛のない配偶者と性行為を持つのは不倫に等しい、と論じている[16]。つまり、「愛のないセックスは売春と同じ」という、赤川の用語によれば「親密性パラダイム」が登場したのである。すると、なし崩し的に「貞操」は一律に論じられなくなる。かつ、チャタレイ裁判以後、澁澤龍彦のサド裁判、野坂昭如の『四畳半襖の下張り』裁判、ストリッパー一条さゆり（初代）の裁判などで、文化人たちが弁護側に立つことによって、性表現の自由を守るのは反権力的な行為だという風潮ができあがる。のみならず、昭和三十年

に石原慎太郎の『太陽の季節』が芥川賞を受賞してベストセラーになり、それにやや先立って登場した吉行淳之介が、娼婦との交情を描いて人気作家になるや、売買春があたかも反権力的な行為であるかのような認識の枠組みが成立してしまう。[17] ほんらい「進歩派」の運動であった売春否定、男の貞操重視の考え方は、「権力」である国家の側が売春防止法を成立させたころには「保守派」の思想に転じてしまう。それは結局、「バーのママ」に姿を変え、トルコ嬢からソープ嬢へと名前を変えた娼婦たちの存在を認めることになってしまうのだが。

売春防止法には、罰則なしで、売春は禁じられる旨記されている。だから、それ以後、公式的には日本には売春行為は存在しないことになってしまったのである。落語家が廓噺を演じる時は、昔は吉原ってえものがありまして、今の若い方はたいへんお気の毒で、といった枕を振る。だが、現実には売春は継続して行われてきたのである。それでも、存在しないことにされているものについて議論をすることはできない。売買春の是非論などが消えてしまったのには、これも原因の一つであろう。

そして、本稿の辿ってきたところから結論されるのは、「純文学」の世界でのみ通用していたデカダン、悪魔主義、本能主義、快楽主義のような思想が、昭和三十年代以降、大衆レベルに浸透してくるということである。『太陽の季節』のような純文学がベストセラーになったあたりからこの現象は起こり、もはや「文士」は市民社会のアウトサイダーではなくなる。石原自身は、その後自由民主党の政治家になることによって「保守派」に転じるが、吉行淳之介が、小説のみならずエッセイで大衆化を果たし、戦後すぐから活躍していた三島由紀夫は『不道徳教育講座』のような露悪的なエッセイを書き、これは今日なお読まれている。昭和三十六年に芥川賞を受賞した宇能鴻一郎は、たちどころにポルノ作家と化すが、その宇能もまた、童貞であるなどは恥ずべきことだという趣旨のエッセイを書く。ここから後は西暦を用いるが、六十年代後半のカウンター・カルチャーとアメリカから輸入された性革命によって、「貞操」や「廃娼」のようなアジェンダはただちに「プチブル」的なものとして文化の先端から排斥され、「猥雑」な演劇や美術が、プチブル出身の学生たちの憧れの的となる。

この風潮のなかで、戦前的な「真面目な」性に関する議論は男性文化の世界で消えてゆき、七六年にセックスとドラッグに明け暮れる生活を描いた『限りなく透明に近いブルー』（当初のタイトルは『クリトリスにバターを』という過激なものだった）で芥川賞を受賞した村上龍は、若者文化の旗手となり、『すべての男は消耗品である。』のようなエッセイで人気を博し、「セックスは愛じゃない、体力だ」といったキャッチフレーズで性の唯物論化を押し進め、八十年代には、田中康夫、山田詠美のような作家が登場してやはり大衆的な人

気を博す。この一連の流れは、大正から昭和初期にかけてのデカダン純文学のエトスが大衆化したものと考えられる。ただし大衆的、プチブル的な性道徳がまだ確実に残存していることを知るためには、絶大な人気を誇るミステリー作家赤川次郎のロマンス小説『ヴァージン・ロード』を読めば分かるし、NHKの朝の連続ドラマが、九七年に大石静が『ふたりっ子』を書くまで、ヒロインは誰一人婚前性交をしなかったという事実に鑑みても理解できる。

こうした七十年代以降の流れのなかで、「性に関する真面目な言説」の領域を確保していたのは、女性解放運動ないしはフェミニズムである。七十年代後半から、『朝日新聞』記者の松井やよりは、日本男性による東南アジア、ないし韓国への売春ツアーを精力的に問題にし始める。しかしながら、それは経済大国による後進国の女性の性の搾取という視点からなされたのであって、「男の貞操」という論点は提出されなかった。また八十年代後半には、当時の宇野宗佑首相の藝者スキャンダルが持ち上がったが、この場合も、恋愛関係だったはずなのに金で始末を付けようとしたとか見当違いの部分で非難がなされ、男の貞操とか、藝者接待とかの根本的な問題にメスが入れられることはなかった。

しかし、このような事態はもはや特殊日本的なものではない、ということが明らかになったのが、九八年の米国大統領クリントンの不倫スキャンダルであり、クリントンは大統領の地位を失うことも米国民の支持を失うこともなかったし、ことに注目すべきはフランスの対応で、『ル・モンド』誌は検察官を非難し、「合意した成人同士の性行為を不道徳だとするとんでもない道徳観」であり「新マッカーシズム」だとしたし、ギグー法務大臣は、フランスではこのようなことはスキャンダルになりえない、と発言した。もはや「結婚の神聖」も「愛」も「貞操」も、フランスには存在しないのである。伊藤整がこれを知ったら何と言うだろうか。

注

(1) 赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』(勁草書房、一九九九)一九五〜六頁、三一四〜六頁。

(2) 「国民之友新年附録」『女学雑誌』百九十五号(復刻版、臨川書店、一九八四)。

(3) 臼井吉見『近代文学論争 上』(筑摩叢書、一九七五)に詳しい。

(4) 藤目ゆき『性の歴史学』(不二出版、一九九八)。藤目は村上信彦の女性史学を批判するのだが、村上が西洋に公娼制度が存在したことを見落としていたのは事実としても、藤目は藤目で、日本近代の公娼制度を記述するに急で、徳川期の公娼制度を見落とし、あたかも一切が「近代」の謀略であるかのごとくに記述する近代抑圧史観に陥っている。拙著『江戸幻想批判』(新曜社、一九九九)参照。

(5) これは現代でいえば『おとなの遊艶地』とか『ナイタイ』とかいった風俗情報誌に相当するが、多くの研究者は、遊女評判記を研究対象としても現代の風俗情

報誌を対象にしようとせず、春画を研究対象にしても現代のポルノグラフィーとは別の基準で論じようとする歴史的ダブル・スタンダードに陥っている。

(6) もっと馬琴も黄表紙や合巻を書いているし、女郎の活躍を描いた『けいせい水滸伝』のような合巻もあって、中途まで翻刻されている。馬琴研究は明らかに立ち後れており、それが近世と近代のつなぎ目に関する研究の障害になっている。

(7) 詳しくは拙著『〈男の恋〉の文学史』（朝日選書、一九九七）第四章を参照されたい。

(8) その蘆花自身は激しい性欲の衝動に悩まされた人間であった、とは、中野好夫の『蘆花徳冨健次郎』（全三冊、筑摩書房、一九七二～七四）の説くところである。中野の本は、読み物として抜群に面白い。

(9) 前掲注(7)拙著第七章を参照されたい。

(10) 柄谷行人『日本近代文学の起源』（講談社文芸文庫、一九八八）九九頁。

(11) この時期の日本文学に対する世紀末思想の影響については、尹相仁『世紀末と漱石』（岩波書店、一九九四）に詳しい。

(12) 鶴田欣也『日本近代文学における「向こう側」』（明治書院、一九八六）。

(13) だが、昭和三十八年の西河克巳による再映画化（吉永小百合主演）では、藝者批判は消えている。

(14) 伊藤整『近代日本人の発想の諸形式』（岩波文庫、一九八六）。

(15) 最近では宮台真司がよく似た立場に立っている。もともと、ブルセラ少女や援助交際少女の心性を明らかにしようとしていた宮台は、彼女たちに「理解」を示そうとしているという理由で攻撃を受け、買春三昧のオヤジどもに攻撃される謂われはない、と怒っている。

(16) 『定本　與謝野晶子全集第十五巻』（講談社、一九八〇）。この論文がシナ語に翻訳されて巻き起こした論争については、張競『近代中国と「恋愛」の発見』（岩波書店、一九九五）第四章に詳しい。

(17) 吉行が一連の娼婦もの小説で権力に抵抗したと評したのは『自由と禁忌』（河出文庫、一九九一）の江藤淳だが、これは吉行の過大評価ではあるまいか。富岡多惠子らの『男流文学論』（ちくま文庫、一九九七）でも、上野千鶴子の吉行論に対して小倉千加子が、吉行の過大評価ではないか、と窘めているが、江藤と上野は、「娼婦―反権力」という奇妙な図式に捉えられているようだ。